

# 地球環境基金 便り

- 巻頭インタビュー：杉良太郎さん……………2
- 特集：世界で活躍する日本の環境NGO・NPO……………4
- 助成団体レポート：メタセコイアの森の仲間たち……………10
- サポーターインタビュー：  
三井住友海上火災保険株式会社……………12
- 地球環境基金のサポーター……………14
- 新評価制度について……………15



特集

## 世界で活躍する 日本の環境NGO・NPO

タイ・バヤオ県セーンサイ村



### サンタフェ ナチュラルタバコ ジャパンとテラサイクルジャパンの取り組み

## タバコの吸い殻リサイクルで 地球環境基金に寄付

「吸い殻ブリゲード」をご存じですか。2014年4月にサンタフェ ナチュラルタバコ ジャパン株式会社とテラサイクルジャパン合同会社が協働で始めたプログラムで、吸い殻を回収して携帯灰皿や堆肥、紙などにリサイクルする取り組みです。参加者には回収した吸い殻の量に合わせてポイントが付与され、地球環境基金をはじめ環境NPOに寄付できるというもの。2015年11月から三菱地所・サイモン株式会社が商業施設として初めてこのプログラムに参加し、同社が展開する全国9カ所のプレミアム・アウトレットの指定喫煙場所からの吸い殻によるポイントを全額、当基金にご寄付いただくことになりました。リサイクルの仕組みづくりに取り組むテラサイクルジャパンの西島加奈さんは「吸い殻が資源として生かされると同時に、環境保全に役立つことを喫煙者に知ってほしい」と話されました。



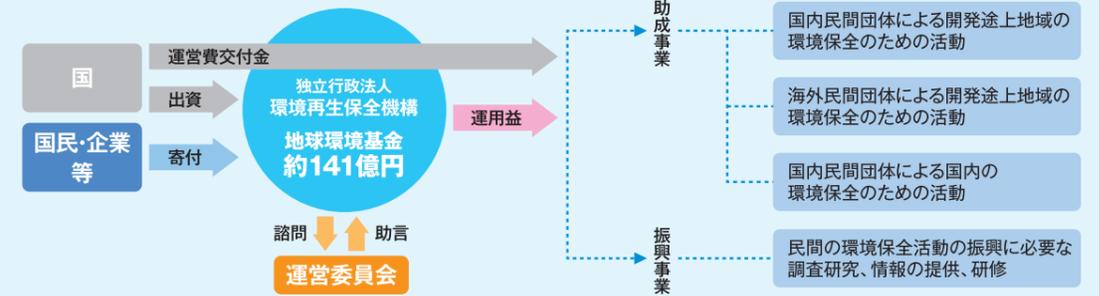
吸い殻も資源であることを呼び掛けるステッカー

お話を伺った西島加奈さん



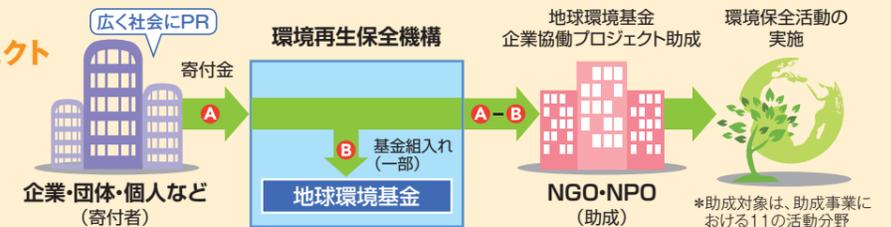
地球環境基金とは

環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体（NGO・NPO）が行う環境保全活動へ支援を行っています。



### 寄付者の貢献が目に見えるしくみ 地球環境基金企業協働プロジェクト

企業・団体・個人などからの寄付を原資に、地球環境基金が寄付者名を明らかにして、国内外の民間団体（NGO・NPO）が行う環境保全活動へ直接助成を行います。



詳細は、<http://www.erca.go.jp/jfge/kigyou/gaiyo.html>



表紙写真

#### 保育所での環境衛生指導

NPO法人シャンティ山口（6ページ参照）は、タイ北部で主にモン族を中心とした山岳民族の自立支援を行っていますが、公的機関の彼らへの支援は必ずしも万全ではありません。そこで、同団体は活動の一環として、地元公的機関に対し粘り強い交渉を重ね、モン族の子どもたちが通う施設内で、タイ人医師・専門家による定期的な健康診断や衛生環境指導を実現させました。

編集後記

40号では「世界で活躍する日本の環境NGO・NPO」をテーマに、現地のニーズに合った支援などさまざまな取り組みをご紹介します。現地に行ったからこそ知り得た先祖伝来の伝統文化から学ぶことの重要性など、生の声をお伝えできれば幸いです。

## 福祉活動は「妄想」のたまもの

芸能活動と並行して長年、福祉やボランティア活動を行ってきましたが、人からよく聞かれるのが「どうしてそこまで一生懸命やるのか」「あなたを駆り立てているものは何？」ということ。正直、自分でもよく分からず、気が付いたら行動しています。誰から頼まれたわけでもないのに、「こうすれば、役に立てる。相手が喜んでくれるんじゃないか」と考えてしまう。あえて言うなら、私を突き動かしているのは、そんな「妄想」でしょうか。一般

## 福祉活動歴56年 具体的な行動こそ大切です

テレビ時代劇「大江戸捜査網」や「遠山の金さん」で主役を務め、明治座や新歌舞伎座の座長公演でも絶大な人気を誇った杉良太郎さん。2016年、芸能活動51年目を迎えた杉さんですが、それ以上に長いのが福祉活動歴で、今年で何と56年。デビュー5年前から始めた刑務所への慰問や、準備期間も含め29年にわたって続けたベトナムへの支援活動。忙しい仕事の合間を縫い、文字通り身銭を切って活動を続けてこられた杉さんに、福祉活動と環境問題についてお話を伺いました。

# 杉良太郎さん

れない。自然の中でその豊かさを感じながら暮らしたくても、もはやそれができません。下北の家は、私にとって「地球に大変なことが起きている！」と実感できる場所となっています。

環境を破壊したのは人間で、環境のためには人間なんていない方がいい……。環境という待たなしの問題を解決するには、ひとごとではなく「明日は我が身」だと受け止める、つまり一人一人の意識革命が不可欠だと思います。例えば、小中学校のときに、もっと環境のことを深く考えさせるプログラムを実施すること。月1回でもそういう機会があれば、ものすごく効果があるでしょう。大人が手をこまねいているうちに環境はどんどん悪化し、取り返しのつかないことになってしまいます。今必要なのは議論ではなく、具体的な行動です。

もう一つ大切なのが家庭教育。私は現在、法務省特別矯正監を務めています。少年院に入ってくるような子どもたちを立ち直らせるには気が遠くなるほど時間がかかります。そうなる前に、小さいうちから親が愛情を注ぎ、やっていいことと悪いことをしっかり教える。大人が教えるという責任を放棄するから、曲がってしまうのです。これは水や空気の汚染と同じで、汚れてからきれいにするのはなく、汚さないことが大事でしょう。根っこの部分、つまり人づくりがおろそかになっている間は環境は良くならない。私は、そう思います。

人生は短い。若い人には自分にタガをはめず、思いっきり生きてもらいたいですね。見える目を持ちながら、見る目を養っていない。聞こえていながら、聞く耳を持たない。あのとき、もっと目や耳を使えばよかつたねとならないよう、もったいない人生だったねと後悔しないように、もう一歩踏み込んでいただけたらと思います。

に「妄想」というとネガティブな印象がありますが、私が入頭の中で描いているのは人が喜ぶ顔であり、より良い社会の姿なのです。

かつて、私の活動を「売名行為だ」と非難されたことがあります。売名でいいじゃないか。売名でもやった方がいい」と答えました。また、「芸能人はお金の余裕があるから」と思う人がいるかもしれませんが、確かにボランティアにはお金がかかります。でも、余裕があつてやるのなら、海外でチャリティ公演を開くために、億単位の借金を個人で背負ったりするでしょうか。寝る間を惜しんで、あちこちの施設を訪ね歩いたりしますか？ 私がよく言うのは「お金のある人はお金を、お金のない人は時間を、時間のない人は理解を」ということ。ボランティアは誰にでもできます。誰か特別に余裕のある人だけがすることはありません。

## 地球の環境を良くするには人間教育が必要

私はもともと自然が好きで、青森県の下北半島に1軒の家を建てました。20年前はアブやアブヨなどの虫はあらず、夏でもクーラーがいらなかった。川には魚がたくさんいて、入れ食い状態でした。ところが、現在はサクラの開花は早まるし、虫も多く、クーラーなしでは暑くていら

杉良太郎(すぎりょうたろう)  
1944年兵庫県生まれ。歌手・俳優。65年、歌手としてデビュー。67年NHKテレビの時代劇「文五捕物絵図」で脚光を浴びる。以降、「大江戸捜査網」「遠山の金さん」などのテレビ時代劇に主演する他、明治座、新歌舞伎座に連続出演するなど舞台でも活躍。歌手としてはミリオンセラーとなったヒット曲「すきま風」がある。社会貢献活動として、法務省特別矯正監、日本とベトナム両国の特別大使、厚生労働省肝炎総合対策推進国民運動特別参与などを務める。緑綬褒章、紫綬褒章受章。



2007年、杉良太郎さんのプロデュースで始まった「アジア国際子ども映画祭」。第9回の2015年は北海道北見市で開催された

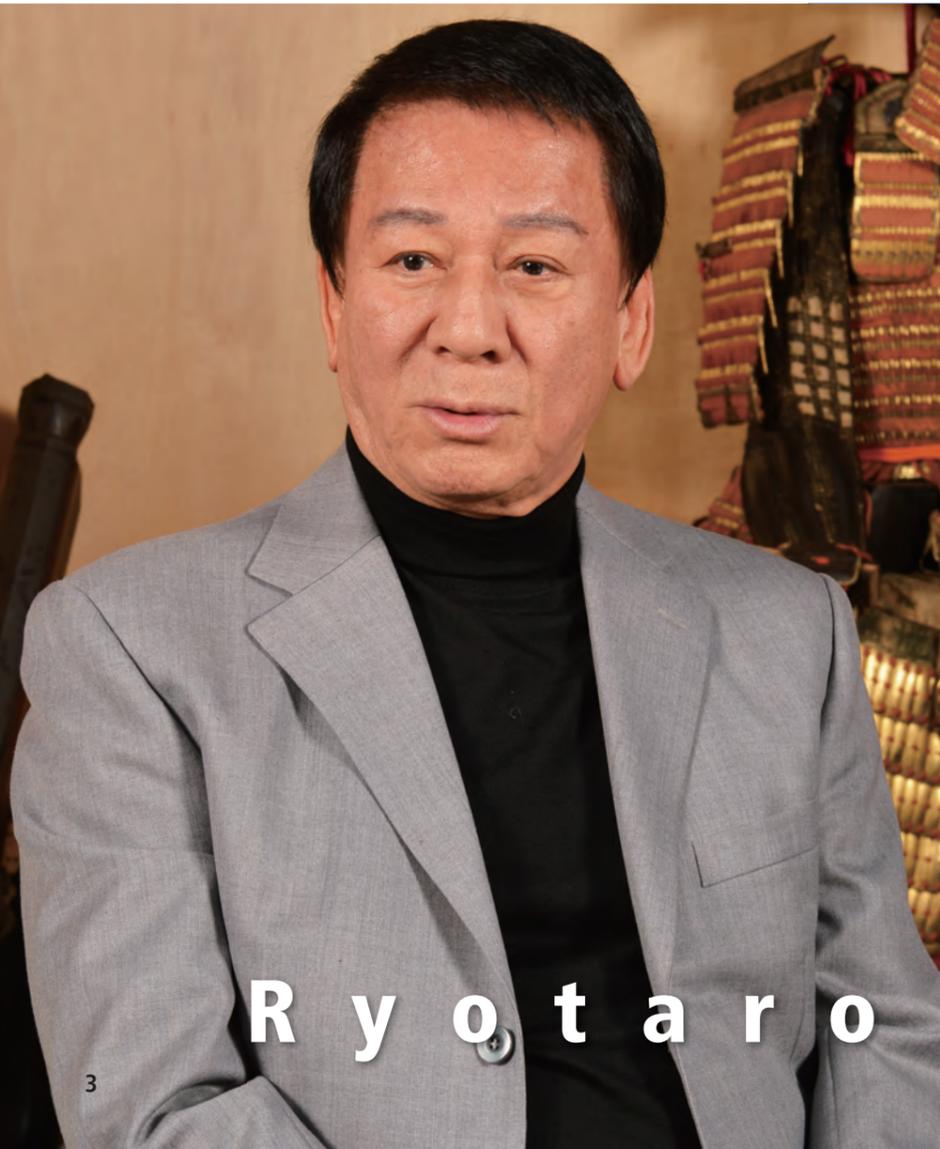


1989年、ベトナム・ハノイ市のバックラー孤児院を訪問。子どもたちと一緒に



千葉県成田市にある杉良太郎農園で、スイカを収穫する杉さん

\*写真提供：株式会社杉友



R y o t a r o

S u g i

# 世界で活躍する日本の環境NGO・NPO



1960年代、派遣した篤農家による日本式の稲作指導

## オイスカの年代別活動テーマ

- 1960年代**  
**FOOD FIRST**  
インドやフィリピンへ篤農家を派遣し、農業改良と食糧増産に寄与。
- 1970年代**  
**GRASS ROOTS**  
アジア各地に研修センターを設け、農業実習を中心に人材育成活動を展開。
- 1980年代**  
**LOVE GREEN**  
森林減少による洪水や干ばつを受け、植林プロジェクトに本格的に着手。
- 1990年代**  
**CHILDREN'S FOREST PROGRAM**  
子どもたちが取り組む森づくり活動「子供の森」計画を開始。
- 2000年代～**  
**ふるさとづくり**  
人と自然が共生する「ふるさと」づくりのための、人材育成、農村開発、環境保全、普及啓発活動。

アジアを中心に世界各地で活動する日本の環境NGO・NPO。地球環境基金はこれまでに、国内外のNGO・NPOが海外で展開する1,285件のプロジェクトに対し、総額約66億円の支援を行ってきました。本号では、こうした活動の中から最新の6事例を紹介し、また、総括インタビューとして、NGOや国際協力といった言葉もない時代にいち早く団体を設立し、長年にわたり海外での農村開発や環境保全活動を展開している公益財団法人オイスカの中野悦子会長にお話を伺いました。

在のNGO・NPOとは少し違うかもしれない。インドでの活動がフィリピンやタイなど他の国々に波及していく中で聞こえてきたのが、「雨季になっても雨が降らない、降ったと思ったら大雨で土砂崩れが起きる」といった声です。私もフィジーで見たのですが、「これが山？」というほど見事な山が山でした。農業に欠かせない水を確保するには森が必要と、1980年からスタートしたのが植林活動です。

## 植林は大規模緑化と「子供の森」計画を併用



1991年にスタートした「子供の森」計画は、現在、世界35の国と地域・4,692校で展開。応援したい国を選ぶことができ、支援者には毎年、子どもたちから手書きのカードが届く



# 同じ目線に立つ。それが、オイスカ流

## ひとごとではない！それがオイスカの原点

オイスカが農業開発団として初めて海外に人を派遣したのは、1966年。当時、インドを大干ばつが襲い、何千人という餓死者が出ていました。「アジアの同胞を救いたい」という創立者・中野與之助の呼び掛けに応え、篤農家17名が農業改良食糧増産のために現地に入りました。前会長（中野良子氏）が「お腹がすいたのとひもじいのは違う」とよく言いますが、彼らは戦中戦後のくひもじさを知っている世代で、インドの飢餓をひとごととは思えなかったのでしょう。この「困っている人を助けたい」という思いは今もオイスカのDNAとして受け継がれており、国際協力や開発支援を出発点とする現

## 国に持ち帰るのは「頑張る心」

「子供の森」計画はもう25年になるので、昔この活動に参加した子どもが先生になり、赴任先で広げてくれるところまできました。また最近では、ゴミの分別を始める学校や、学校菜園にハーブを植え、それを村人に配るなど、現在のオイスカの活動テーマである「ふるさとづくり」へと発展しているケースもあります。

## 長期的な支援のために顔の見える工夫を

森づくりや村づくりは、すぐには成果が出るわけではありません。私たちがもかつて期間を見誤って苦労したことがありません。10年計画といっても、実際には20年30年と関わらざるを得ない……、そのあたりをどう支援者の皆さんにご理解いただくか。ただ、マングローブ植林に100年コミットすると宣言してくださる企業もあり、少しずつ理解も進んでいるのかなと感じています。



Etsuko Nakano

## 総括インタビュー

## 公益財団法人オイスカ 会長 中野悦子さん

1950年福岡県生まれ。1969年福岡県立八女高等学校卒業。1971年中野学園天文学専門卒業後オイスカ・インターナショナル総裁秘書。1990～2011年財団法人国際文化交友会理事。1996年10月にオイスカ・インターナショナル副総裁に就任。また、2015年6月より公益財団法人オイスカ会長、および公益財団法人国際文化交友会顧問に就任し現在に至る。

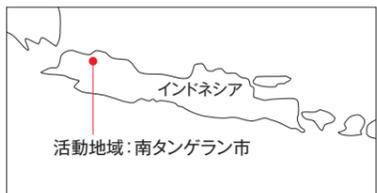
事例  
2

一般社団法人 インドネシア教育振興会

一ジャワ島・南タンゲラン市における  
社会起業型総合環境教育プログラムの開発一

<http://www.baliwind.com/>

草の根の活動がつないだ  
富山とインドネシアの教育現場



子どもたちが読んでいるのは、地球環境基金の助成を受けて作成された教材



教材は子どもたちの反応を確かめながら作成



イタイイタイ病資料館を訪れたインドネシアからの研修一行



富山市立寒江小学校(ユネスコスクール)にあるコンポストの説明を受ける

大学の資源をフル活用し  
活動を拡大

2000年、観光で訪れたインドネシア・バリ島で、雨の中をばだしてモノ売りする子どもたちを目撃した窪木靖信さん(代表理事)。その光景に心を打たれ、地元富山に戻ると、インドネシアに詳しい留学生を紹介してほしいと富山大学に連絡を取ります。そのとき紹介された同大学院生のファディラ・ハシム氏と2人で立ち上げたのが、インドネシア教育振興会です。

その後、窪木さんは、盟友ハシム氏からのアドバイスもあり、「教育についてもっと勉強しよう」と富山大学教育学部(現：人間発達学部)に社会人入学し、さらに大学院へ進学。野平慎二教授(現：愛知教育大学)、根岸秀行

インドネシアの  
教育者による  
教材作成をサポート

教授(現在、同学部附属小学校校長を兼務)と出会います。2人は、窪木さんの行動力に感銘を受け、できる限りのサポートを約束。学部の学生たちもインドネシアへの研修ツアーに参加するようになり、富山とインドネシアの教育現場がダイレクトにつながるようになりました。

教授(現在、同学部附属小学校校長を兼務)と出会います。2人は、窪木さんの行動力に感銘を受け、できる限りのサポートを約束。学部の学生たちもインドネシアへの研修ツアーに参加するようになり、富山とインドネシアの教育現場がダイレクトにつながるようになりました。

形になりがちですが、同団体は「現地事情を反映しなければ効果は薄い」と考えました。

教材作成に当たっては、まずインドネシア側の委員を富山大学に招き、教育現場の視察や子どもへの指導方法について意見交換。そして、この研修に参加したインドネシアの大学の先生などが共同で教材を執筆したのです。完成したオリジナル教材は5千部印刷し、南タンゲラン市の3地域、20校に約220冊ずつ配布され、授業で使われています。窪木さんいわく「基金の場合、先駆的な活動を理解していただけに、インドネシアからの渡航費も認められます。基金の助成がなければ、このような教材はできなかったでしょう」。現在、この活動は2014年1月に始まったJICAのプロジェクトへと発展しています。

当事者主義で成功した  
2つの事例

山口と北タイ  
富山とジャワ島

強い絆が 希望を生む

世界で活躍する  
日本の  
環境NGO・NPO



事例  
1

特定非営利活動法人 シャンティ山口

一タイ国・北タイ地域「トウモロコシ栽培で荒廃した農地を果樹林に」  
森林再生と農村開発一

<http://www.shanti-yamaguchi.com/>

タイ北部・山岳少数民族の  
自立を支援して23年



不法伐採した山の斜面に植えられた遺伝子組み換えのトウモロコシ



果樹への転作で緑がよみがえってきた山の斜面



村民総出で行われた栽培地に続く作業道の補修



2016年2月に20周年を迎えたシャンティ学生寮。これまでに270人が集まっている

支援の基本方針は住民の  
自立心を育てること

1993年に設立されたシャンティ山口。以来、タイ北部のラオス国境に接したバヤオ県セーンサイ村を拠点に、モン族を中心とした山岳少数民族の自立に向けた支援を続けています。彼らはラオスからの難民で生活基盤も乏しく、いまだ困難な生活を強いられています。こうした状況の下、地球環境基金のプロジェクトとして、2005年からエコトイレの設置やアグロフォレストリー※の導入などを実施してきましたが、注目すべきはその支援方針です。

今、セーンサイ村近くのホイブム村では、遺伝子組み換えトウモロコシの過剰な栽培地拡大により、森林消滅や農業散布による健康被害、農地荒廃、

収穫までの数年はガマン  
明日を信じた転作

んでこそその支援です。例えばエコトイレなら、設置するとう生活が変わるのか？そこをまず理解してもらいます。そして、設置工事も自分たちの手で。工事しながら仕組みを理解すれば、自身で補修できますからね。こちらで設置して「はい、どうぞ」では、いつまで経っても自立できません。自らの問題として取り組むのが何より重要」と強調します。

※植林し、その樹間で家畜農作物を飼育栽培する農林複合経営

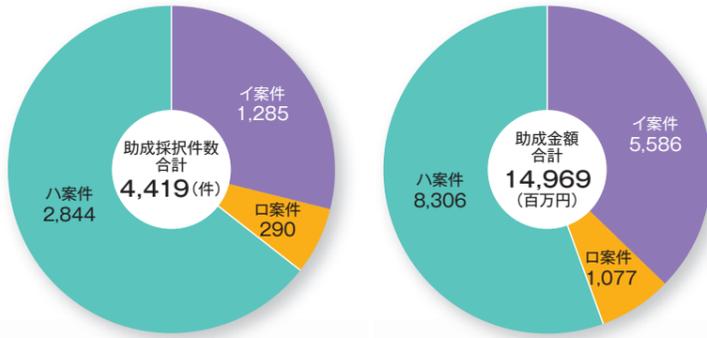
水源枯渇などの問題が起きています。トウモロコシの収穫量アップを望んだものの、結果的には多くの問題を抱えることに。シャンティ山口は地元村民のモン族と共にこの問題に取り組みたいですが、理想論を振りかざして、彼らに転作を強要することはありません。決めるのはあくまで村民なので、希望者にラムヤイヤマンゴーなどの苗を支給し、果樹への転作を支援しています。

ただし、本格的な収穫は数年先……。佐伯さんによれば、転作を完了した村民は自らは満足しているものの、本格的な収穫ができるまでは家族を村に残し海外へ出稼ぎに行くのが現実だそう。残された家族は苗木を管理するともに、果樹間に植えたインゲン豆や落花生などで現金収入を得ています。こうした厳しい現実を覚悟して、希望に満ちた転作なのです。

地球環境基金の海外での活動に対する支援実績  
(1993~2015年)

- I案件: 国内民間団体による開発途上地域の環境保全のための活動
- O案件: 海外民間団体による開発途上地域の環境保全のための活動
- H案件: 国内民間団体による国内の環境保全のための活動

I案件とO案件の合計が、開発途上地域での環境保全活動に対する支援実績です。9ページに掲載した2団体はO案件であり、助成に際しては国内の団体や個人の代理人が窓口となり、プロジェクトの進行を管理しています。



\*開発途上地域のNGOにも助成を行っています。

有機農法によって、経費削減&地力回復!  
2年目も20村を対象に研修を実施予定

South Asian Network for Social & Agricultural Development (SANSAD)

●プロジェクト概要

インド・ウッタール・プラデーシュ州における気候に配慮した持続可能な農法の採用による、少数派コミュニティの食料安全保障強化活動(2014年~)

化学肥料や殺虫剤の大量使用により、生産コストが上昇。さらに、土地が疲弊し収益が頭打ちとなっています。この問題を解決するために、有機農業の講師を25名養成。彼らが20村で農民を対象に研修を実施しました。200名以上が参加し、受講者の3~4割が自分の土地で早速有機農法を実践するなどの成果が出ています。

●活動にかける思い

人口の6割が農民のインドでは、化学肥料の導入で農業コストが上昇し、困窮した農民の自殺が頻発。有機農法による低コストで健全な農業の普及はSANSADの夢でしたが、世界的不況で多くのドナーが支援から撤退。地球環境基金の支援を得て、夢の実現に向けて動いています。(事務局長:Anil K.Singhさん)

Q:窓口であるNGO・シャプラニールに期待することは?

基金の規定に沿った申請書作成や資金管理に対する指導と、事業実施への助言です。事実、シャプラニールはたくさんインプットしてくれるし、基金とのパイプ役にもなってくれています。

\*現地で活動するSANSADの日本側窓口がシャプラニールという日本のNGOで、ここが事業全体の進行を管理します。

Q:啓発活動で効果のあったツールは?

地理的・社会的・文化的状況によって異なります。事業地のような田舎では壁画メッセージや村芝居、ビデオ上映、会議・展示会などが有効です。一方、昨今の都会ではSNSが非常に有効です。



自分の農地で有機野菜を育てる研修受講生



壁画メッセージ「大地は化学肥料のない農業を求めている」

体験型ワークショップによって再発見した  
伝統文化と自然の大切さ

Cordillera Green Network Inc.

●プロジェクト概要

フィリピン・ルソン島北部山岳地方マウンテン州における教職員を対象とした環境指導者養成事業(2013年~)

森林伐採や鉱山開発により環境破壊が進むルソン島北部山岳地域。ここに住む先住民の環境意識を高めるため、教師を対象に環境教育の指導者育成講座を開催。ここで学んだ教師が、それぞれの学校で野外教室やアート、演劇などを活用した体験型ワークショップを実施しました。今後は州の教育委員会へも働きかけていきます。

●活動にかける思い

先進国の環境問題が地球規模の広がりを見せている現在、一見、「遅れている」と思われがちな先住民族の先祖伝来の伝統や暮らしにはむしろ学ぶところが多くあります。「学び合う」というスタンスで、事業終了後も活動の成果を広げていきたいと思えます。また、日本側の代理人が助成活動の進捗管理や、指導・協力してくれるので感謝しています。(代表理事:反町真理子さん)

Q:ファンドレイジングで工夫している点は?

先住民コミュニティでの生計向上事業で栽培しているフェアトレード・コーヒーの日本への販売収益や、先住民の暮らしを体験するスタディーツアーの参加費を活動費に充てています。また、企業のCSR活動のパートナーとして植林や環境教育を行っています。

Q:先住民族との関わりで大事なことは?

古来、自然と共に生きてきたはずの先住民族が失いかけている伝統や知恵に焦点を当てたプログラムを行っています。何よりも彼らの文化に対する尊敬の気持ちを大切にしています。



演劇を活用した環境教育ワークショップ(2015年、マウンテン州バウコ町開催)



アートを活用した環境教育ワークショップ(2014年、マウンテン州バーリグ町開催)

伝統文化の再発見から気候変動への対応まで  
現地のニーズに合った支援を展開

海外支援の場合、そのバックグラウンドは国内以上に千差万別であり、誰をメインターゲットに、どのようなプログラムを展開すれば有効なのかを見極めることが重要となります。

ここでは、4事例から海外で成功するプロジェクトの鍵を探ります。

世界で活躍する  
日本の  
環境NGO・NPO



女性がリーダーとなって、異常気象被害に  
強いコミュニティをつくる

一般社団法人 イクレイ日本

●プロジェクト概要

フィリピンにおける気候変動対策のためのコミュニティ活動と都市間協力事業(2013年~)

異常気象被害や急速な経済発展によるCO2排出量の増加などの課題に直面するフィリピンのトゥビゴン市において、全地区から約50名の女性リーダーをワークショップに招集。防災活動や再生可能エネルギー利用などの実習を行い、活動計画づくりを支援しました。今後、女性向け冊子を作成し、他地域への普及を目指しています。

●活動にかける思い

フィリピンは、世界で最も自然災害が多発する国の1つ。気候変動の激化に伴い、その備えもさらに必要になっています。女性たちが今必要な知識と活動は何か、日本の経験も交えて現地の人々と考え、女性たちのコミュニティ活動を支援していきます。(シニアプログラムアドバイザー:岸上みち枝さん)

Q:ワークショップで大切にしていることは?

被災する危険性のある、環境の悪い場所に住まざるを得ない人たちが大勢います。現地の女性たちの意見や必要性を理解することが、事業を行う上で重要なことだと思います。

Q:活動成果を計る指標、検証方法は?

ワークショップ後に、活動のフォローアップやアドバイスをし、その過程で理解度を確認。また、フィリピン側で現地専門家たちと作る教材の質を、事業成果を計るための指標としています。



どんな災害の危険性が高いか話し合う

エネルギーの仕組みを考える



子どもたちから地域住民へ、そして  
他地域にも広がった苗木育成・植林活動

特定非営利活動法人 日本ハビタット協会

●プロジェクト概要

ラオス国における学校を中心とした持続可能な植林活動による環境保全(2012~2014年)

学校を中心に、地域住民や自治体、農業局、森林局と協力して苗木を育て、3年間で108.1ha・4万1,812本の植林を実施しました。また、ワークショップには3年間で延べ3,908人が参加。こうした活動の結果、自主的に校内緑化やゴミ分別に取り組む学校が現れ、さらに植林活動は他地区や隣県にまで広がりました。

●活動にかける思い

人々の暮らしと自然環境が守られた地域社会をつくり、ラオスの発展に寄与したい。本事業の主役は地域の人々です。地域の人々が自分たちの力でより良い未来と持続可能な社会を築いていけるよう支えていきたいと思えます。(プロジェクト担当:篠原大作さん)

Q:現地での活動後継者は育っていますか?

各活動を通して各地区の担当者の事業運営能力が向上しました。また、担当者を明確にすることで責任感も養われています。農業局や教育局からのサポート体制も進んでいます。

Q:活動の成果を支援者にどう伝えていきますか?

ホームページや広報誌だけでなく、国際協力イベント、そして月2回開催している外貨コイン仕分けボランティア活動の際に写真などで活動状況をお知らせしています。



学校でのワークショップ



植えた木の周りで陸稲を栽培

## 獣害対策の技術研修会「けもの塾」

2015年11月19・20日の2日間、岐阜県郡上市の母袋スキー場ロッジをメイン会場に、特定非営利活動法人メタセコイアの森の仲間たちが主催する第4回「けもの塾」が開催された。当日は、北海道と愛媛県の各地から、林業支援団体・地域おこし協力隊学生・NPO関係者など17名と、「けもの塾」関係者11名が参加し、「猪鹿庁の作り方」「獣害対策支援現場の視察」「解体処理施設の見学」をメニューとする研修が行われた。過去3回は、座学で「野生動物生態概論」「被害防止計画立案」など、実習では「集落環境診断」「電気柵」「捕獲技術」「ICT（情報通信技術）活用による被害対策手法」などを実施。



スキー場ロッジの大広間で開催された座学の様子

を受けている方々に、自分たちの問題として取り組んでもらうのがポイント」と興膳さん。

猪鹿庁は2009年より、集落を対象に講習会や捕獲支援、猟具レンタル、捕獲後の処理支援などを実施してきた。開発した捕獲檻「肉の畑」は実用新案特許を取得し、現在8集落に19基が導入されている。また、猪鹿庁の活動により、集落で新規に狩猟免許を取得した人が8名、捕獲補助員（郡上市の研修を受け、檻の設置補助・見回り・餌まきをする人）が78名となったのも大きな成果だ。興膳さん



郡上漁業協同組合の「長良川源流の森」植樹現場を視察。猪鹿庁が獣害対策を支援している



解体処理施設で年間100頭のシカやイノシシをさばる猪鹿庁のメンバーから説明を受ける

塾」を運営するのは、4団体で構成された「一般社団法人ふるさとけものネットワーク」。

メタセコイアの森の仲間たちの部門「獣害対策専門チーム「猪鹿庁」」がその一員であり、事務局も同団体内に置かれている。ちなみに、他の3団体はNPO法人新潟ワイロドライフリースーチ（新潟県）、合同会社AMAC（千葉県）、そして特定非営利活動法人甲斐けもの社中（山梨県）。

### 示唆に富む座学「猪鹿庁」の作り方

初日の座学「猪鹿庁の作り方」を担当したのは、メタセコイアの森の仲間たちの代表理事であり猪鹿庁長官の興膳健太さん。猪鹿庁のミッションは「猟師として生き、猟師として山を



猪鹿庁が支援する集落の人が仕掛けた「くくりわな」の現場を視察

### 「アカルイミライ」は地域にある。

狩猟を6次産業化して里山で生きていく！



猪鹿庁のメンバー。前列中央で猟銃を構えているのが長官の興膳健太さん

守る」ことで、獣害対策・里山保全・狩猟・製造加工・販売サービスという連の流れ（下段フロー図参照）を視野に入れて活動している。「特に力を入れているのは、地元農家集落に対する獣害対策自立支援です。被害



「くくりわな」の近くに設置されたセンサーカメラ



猪鹿庁のマーク

助成団体レポート  
行ってみました！  
「けもの塾」の現場



研修会初日の朝「くくりわな」でシカを捕獲。夕方、解体の体験会が開催された

「FKNのFは、furusatoのフ。私たちはふるさと、つまり地元をこたわって活動をしています。獣害対策は全国一律というものではなく、その地域特有の要因が大きい。自然環境はもちろんだが、適したものの種類、防護ネットか電気

柵か、猟友会との関係、行政との連携など、検討すべきことは実に多いのです。各地域で活動する団体をネットワーク化し、それぞれのノウハウを共有・活用する「FKN47」を、ぜひ実現したいですね」

各団体のノウハウを蓄積公開している「けもの塾」。今後の活躍、そして全国展開が大いに期待される。

取材協力  
NPO法人メタセコイアの森の仲間たち  
<http://metamori.org/>  
猪鹿庁  
<http://inoshika.jp/>

農林水産省によると、2013年度の「全国の野生鳥獣による農作物被害」は約199億円で、このうちシカが約76億円、イノシシが約55億円。この問題にどう取り組むべきか、獣害対策の最前線「けもの塾」の現場を訪ねた。

# 獣害対策で地域を元気にする！

## 里山保全と猟師の6次産業化





お話を伺った**秋葉勝敏**さん  
三井住友海上火災保険株式会社  
総務部地球環境・社会貢献室 次長

2014年度は社員とその家族1600名余りが参加。各エリアで地元NPOの指導を仰ぎ、オオアワダチソウの除去(ウトナイ湖)やヨシ刈り(蕪栗沼・谷津干潟)、外来魚釣り(琵琶湖)、アオサの除去(和白干潟)といったボランティア活動に汗を流しました。

**都心の環境情報発信拠点 ECOM駿河台**  
2012年5月、三井住友海上駿河台新館オープンに伴い、敷地内に地域に開かれた環境コミュニケーションスペース「ECOM駿河台」が誕生しました。ここでは、環境NPOとの共催で、小学生を対象とした「緑のこども

\*写真提供: 三井住友海上火災保険株式会社



環境コミュニケーションスペース「ECOM駿河台」



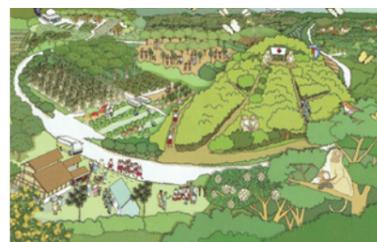
ツアーメンバーと三井住友海上の現地法人が小学校を訪問し、交流会を開催



小学校教師に対する環境教育



トウガラシの栽培を中心に農業指導



バリヤン野生動物保護林の目指す姿



バリヤン野生動物保護林は、ジョグジャカルタ市内から車で約1時間のところにある



植林地をトレッキング。写真はバリヤン野生動物保護林にある展望台で、後ろにプロジェクトを示す看板が見える

# 三井住友海上

日本を代表する損保会社の一つ、三井住友海上火災保険株式会社。同社には、これまでに寄付を通じて地球環境基金を支援していただいています。「インドネシア熱帯林再生プロジェクト」を中心に三井住友海上の環境への取り組みについてご紹介します。



サポーターインタビュー  
NPOを支える方々

## Heart & Heart

### 三井住友海上の環境に対する取り組み

#### プロジェクト開始までの経緯

2004年、植村裕之社長(当時)の「当社は紙を大量に消費する。紙の元になる木を植えて地球に恩返しをしよう」という掛け声の下、熱帯林の再生を検討。住友林業株式会社から、インドネシア政府・林業省が「森林回復の国民運動」を展開しているとの情報を得て、インドネシア政府と共同で、バリヤン野生動物保護林の再生を行うことを決めました。

#### 約30万本を植樹した第1期

(2005年5月〜2011年3月)

ジャワ島ジョグジャカルタ特別州にあるバリヤン野生動物保護林は、地元住民の不法伐採により荒廃。そこで、第1期は350ha(東京ドーム70個分)に、30種・約30万本の苗木を植樹しました。果樹なども併せて植樹し地元住民が果実を利用できるようにしています。また、ガジャマダ大学と連携して生態系の回復を確認するモニタリングを実施するとともに、地元小学生に森の大切さを知ってもらえるよう環境教育も行っています。

#### 森林再生と地域社会の持続的な形成の第2期

(2011年4月〜2016年3月)

不法伐採により荒廃したという経緯を踏まえ、第2期は、不法伐採の再発を防ぐためには地元農民の経済的自立を図ることが重要と考え、農業技術指導を実施しています。40名の住民が参加し、トウガラシの栽培やマーケティングのノウハウを習得した結果、収入が大幅に向上。彼らは組合を設立するなど、自立化の取り組みを加速化させ、2015年2月には正式に県の協同組合として認可されています。また、第2期は環境教育の対象を小学生から小学校の教師に変更。教師への環境教育により教育効果の広がりが期待できます。産官学が連携した本プロジェクトは、「森林修復のお手本」と高い評価を得ています。

#### 地球環境基金に望むこと

保険で「More Eco」「Green Power」サポーター」を「存在」ですか。これは紙の使用量を削減する「eco保険証券」「Web約款」「電子契約手続き」、環境にやさしい自動車修理を行う「リサイクル部品活用」、CO<sub>2</sub>や有害物質の排出を削減する「エコ整備・エコ車検」の達成度に応じて環境保全活動などに寄付する同社の制度です。契約者がこれらを利用すれば、その分が寄付され、地球環境保全につながります。地球環境基金への「寄付も、こうした取り組みの成果とのこと。」

秋葉勝敏さんは「お客さまの協力を得て、「保険でできるエコ」の輪を広げていきたいですね。それが地球環境基金などの基盤づくりを生かされ、NPOが持続可能な社会づくりに向けて活躍されることを期待します」と話されました。

## 環境への取り組みは損害保険会社のミッション

2014年度から社員などを対象とした現地視察ツアーを実施。初年度は31名、2回目となる今年度も21名が参加し、関係者との交流や植林、農業、植林地のトレッキングなどを体験しました。参加者からは「現地に行っただからこそ理解できた」「長期的な取り組みの大切さを知った」といった感想が寄せられています。それぞれが体験を職場に持ち帰り、同僚に伝えることも大切な啓発活動の一つです。

### 地元NPOとの協働で地域の環境保全に貢献

三井住友海上は、NPOを支援する際には、資金援助だけではなく、「協働」を前提にしています。例えば、同社が属するMS&ADインシユランスグループは全国10エリアで水辺の環境保全活動「MS&ADラムサールサポーターズ」を展開していますが、

2014年度は社員とその家族1600名余りが参加。各エリアで地元NPOの指導を仰ぎ、オオアワダチソウの除去(ウトナイ湖)やヨシ刈り(蕪栗沼・谷津干潟)、外来魚釣り(琵琶湖)、アオサの除去(和白干潟)といったボランティア活動に汗を流しました。

### 緑がよみがえったバリヤン野生動物保護林



植林前(2005年10月)



植林後(2015年1月)

# 地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、平成27年7月から12月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、さまざまなイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。



平成27年7月から12月末日現在までに444件、総額**4,918,332円**のご支援をいただきました。ありがとうございました。

## 個人

- 秋元 良一
- 飯田 浩二
- 石井 宏作
- 石田 知子
- 伊藤 忠良
- 伊藤 嘉尊
- 井上 雅晴
- 井本 敦幸
- 今井 博人
- 今川 捷子
- 上村 俊之
- 碓井 疆
- 大町 宏志
- 岡野 香代子
- 岡野 義幸
- 岡本 昇
- 小野澤 亮二
- 笠井 洋
- 片岡 真一
- 唐澤 竜一郎
- 草薙 智紀
- 組谷 雅一
- 藏重 徹雄
- 倉嶋 江実
- 栗山 俊勝
- 黒澤 光恵
- 小西 みゆき
- 小林 大
- 小山 裕美
- 櫻井 啓之
- 佐藤 元基
- 佐野 郁夫
- 篠原 泰
- 嶋元 誠
- 杉本 光史
- 鈴木 みえ子
- 鈴木 康夫
- タイラ マキコ
- 高橋 浩二
- 多賀 洋輔
- 武井 沙織
- 田坂 英樹
- タテシ
- パウラナオミカワバタ
- 田中 健三
- 千葉 英子
- 鳥海 峰子
- 中込 昭
- 中野 明子
- 中村 亨
- 中村 典男
- 荷方 利幸
- 西久保 裕彦
- 西山 哲夫
- 猫ジャンヌタルクオグラ
- 原田 祐佳
- 日向 重友
- 日比野 静男
- 福井 光彦
- 福島 桃子
- 藤田 周一
- 藤田 潤子
- 福原 未来
- 堀江 正義
- 本田 聡
- 牧 美穂
- 松木 正幸
- 圓井 悟
- 丸山 慎介
- 湊 亮策
- 宮崎 孝雄
- 村瀬 岳男
- 矢野 孝雄
- 横川 拓郎
- 吉田 一博
- 吉田 実
- 吉田 寧
- リネットジャパングループ株式会社 お客様
- 和久井 孝洋
- 渡辺 康男

## 企業

- 株式会社アクチュアル
- アーク引越センター株式会社
- イーパートナーズ株式会社
- 有限会社インターリンク
- 株式会社内田洋行 九州支店
- NTTGPエコ株式会社
- 株式会社カワサキ電通
- キリン株式会社
- 五島冷熱株式会社
- 株式会社ジェイアール西日本デイリーサービスネット
- 株式会社ジャパンクリエイティブ
- ジャパンベストレスキューシステム株式会社
- 株式会社そごう西武
- ソニー銀行株式会社
- 有限会社第一環境
- 株式会社橋フィナンシャルグループ
- 千代田工商株式会社 有志
- 株式会社トーカイ
- 株式会社引越一番
- 日本リライアンス株式会社
- 能勢電鉄株式会社
- 美容室エムウェーブ
- ファミリーマート八王子甲州街道店
- ファミリーマート 美濃上条店
- ブックオフコーポレーション株式会社
- ブックサービス株式会社
- 株式会社VOYAGE GROUP
- 三井住友海上火災保険株式会社
- 三井住友カード株式会社 東京法人営業部
- 三菱UFJニコス株式会社
- リネットジャパングループ株式会社

- 環境省 自然環境局 総務課
- 環境省 総合環境政策局 総務課
- 環境省 総合環境政策局 環境経済課
- 環境省 大臣官房 大臣室
- 環境省 大臣官房 秘書課
- 北秋田市役所 合川総合窓口センター
- 九州環境パートナーシップオフィス
- 九十九里町役場 まちづくり課 環境係
- 草津市役所 環境経済部 環境課
- 五泉市役所 環境保全課
- 小平市こみ減量推進実行委員会
- 佐賀市役所 久保田支所環境課
- 佐野市役所 市民生活部 クリーン推進課
- 白鷹町役場 町民課
- 上越市役所 自治・市民環境部 環境保全課
- 都留市役所
- 中津川市役所 蛭川総合事務所
- 那須塩原市役所 生活環境部 環境管理課
- 浜中町役場 町民課
- 広尾町役場 住民課 環境衛生係
- 富士市役所
- 美作市市民部 暮らし安全課
- 安来市環境政策課

## その他

- あ渡辺飼育センター
- 伊丹市エコロジーマーケット実行委員会
- いばらき環境フェア2015 梅花女子大学 茶道部
- 岩倉市環境フェア実行委員会
- ジェラテリア・スマイ
- 認定NPO法人環境文明21
- 一般社団法人全国燃料協会
- 日経WOMANフォーラムプレミアム2015
- 日本大学高等学校生徒会
- 公益社団法人日本フィナンソロピー協会
- 公益財団法人西日本産業界貿易コンベンション協会
- 一般社団法人年輪クラブ事務局
- 公益財団法人フォーリン・プレスセンター
- (五十音順・敬称略)

\*このリストは、地球環境基金への振込通知書等に記載された名称・氏名に基づき作成しておりますので、個人および企業・団体等の区別につきまして必ずしも正確ではない場合があります。また、紙面の都合により、ご寄付・ご支援くださったすべての方々のお名前を掲載できない場合もございますので、ご了承ください。

## 国・地方公共団体

- 明石市 環境部環境総務課
- 石巻市 生活環境部 環境課
- 斑鳩町役場 環境対策課
- いちき串木野市役所 生活環境課
- 田舎館村役場 厚生課
- 大牟田市役所
- 越知町役場 環境水道課
- 尾鷲市役所 環境課
- 開成町役場 町民サービス部 環境防災課

## 「地球環境基金便り40号」読者アンケートにご協力ください

アンケートは、このページのアンケートはがき、およびホームページ「地球環境基金の情報館」のアンケートページ (<https://www.erca.go.jp/jfge/info/publicity/tayori/form/40.php>) において受け付けております。皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

## Present

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に、地球環境基金オリジナル・エコバッグをプレゼント(応募締切:平成28年8月末)。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



## ご寄付口座のご案内

「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。お振込みの手数料は無料です。

銀行名/支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-0-664214	地球環境基金
新生銀行/本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行/東京公務部	普通預金 3013615	
三菱東京UFJ銀行/本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行/本店	普通預金 2413416	
りそな銀行/赤坂支店	普通預金 1023850	

同一金融機関でのお振込みについては、取り扱い窓口でお申し出ください。  
 ①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。  
 ②ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合には、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部基金管理課(TEL:044-520-9606)へご連絡ください。  
 ※その他にも、クレジットカードを利用したご寄付や、楽天銀行を利用したご寄付が可能です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。  
 地球環境基金の情報館 <http://www.erca.go.jp/jfge/>

# 改善のための評価を目指して

## 新評価制度本格始動!

2014年度より導入された新評価制度が、1年間の試行期間を経て2015年度より本格的にスタートしました。対象となるのは3年間にわたり助成を受ける団体ですが、その狙いと仕組みについてご紹介いたします。

## 評価制度とは

地球環境基金では、2006年から第三者の専門家から構成される地球環境基金評価専門委員会(松下和夫主席)において、助成団体の中から毎年分野を絞り、現場を訪問して「計画の妥当性」や「実施プロセス」などの観点から評価を実施。その成果を助成金交付要領や審査方針に反映してきました。

## 新制度の狙いと仕組み

従来の評価制度では、活動3年目に評価専門委員会による現地調査を実施

## 新評価制度の仕組み

### 評価制度仕組み図



事後評価(現地訪問)  
評価専門委員が現地を訪れ、活動の状況を団体職員から聞き取り評価に反映させます



事後評価(現地訪問)  
海外の活動についても、評価専門委員が現地を訪れます



中間評価  
評価専門委員と面談し、直接アドバイスを受けます